

## シンポジウムⅡ「消化管炎症と腸内細菌：基礎と臨床の接点」

司会	樋口和秀（大阪医科大学第二内科） 安藤 朗（滋賀医科大学内科学講座（消化器内科））
基調講演	溝口充志（久留米大学医学部免疫学講座）

### 【司会の言葉】

消化管は常に様々な外来性物質や微生物の侵入という危険にさらされており、強い炎症活性を持つ免疫担当細胞と、炎症を抑制する免疫担当細胞がバランスを保って恒常性を維持している。さらに、腸内細菌やその関連代謝物質と直接接する消化管上皮は様々な反応を介して生体のバリアとしての役割を果たしている。特定の腸内細菌や、あるいは腸内細菌叢のダイナミックな変化が、消化管上皮バリア機能の破綻や、免疫担当細胞の過剰な免疫反応を誘発することが示唆されているが、詳細は明らかとなっていない。

近年、メタゲノム解析を用いた腸内細菌叢の詳細な解析が報告され、消化管疾患のみならず様々な疾病における腸内細菌叢が健常人と異なった組成であることも明らかとなってきた。しかしながら、消化管の炎症性疾患における腸内細菌叢の影響に関してその詳細は未だに不明な点が多く、生体の免疫や消化管上皮細胞の応答など、今後明らかにしていくべき課題は山積している。

本シンポジウムでは、腸内細菌が消化管の炎症に及ぼす影響および便移植や probiotics などの投与による効果などに関する、基礎的・臨床的な研究を広く公募したい。